

ワーカーズ

<http://www.workers-net.net/>
[mail workersnet@workers-net.net](mailto:workersnet@workers-net.net)

毎月1日発行 1部150円 半年1000円(郵送)
郵便振替 00180-4-169433 (ワーカーズ社)

2018/6/1 583号

今号の内容

- ・二正面作戦に自ら陥るトランプ外交と「自分・ファースト」——米国外交の転換と半島和平に背を向ける安倍政権 ②③
- ・米朝首脳会談 危険な駆け引きは止めよ——着地点をめぐるつばぜり合い—— ③⑤
- ・コラムの窓…… ⑤
- ・読書室 『米軍の北朝鮮爆撃は6月！米、中が金正恩体制破壊を決定する日』 ⑥⑦
- ・読書室 『ヒト——異端のサルの一億年』 ⑦⑧
- ・何でも紹介 通販生活(夏号)の特集『九条と沖縄』 ⑧⑨
- ・袴田さんに一刻も早い無罪判決を！ ⑨
- ・色鉛筆…… ⑩

さらに過労死を拡大する

高度プロフェッショナル制度反対！



過労死遺族会の官邸前での抗議行動

今必要なのは実質の労働時間短縮だ！

5月25日、高度プロフェッショナル制度を含む法案が、野党が抵抗する中、衆議院厚生労働委員会でも可決されました。

この法案の委員会での可決に対し、全国過労死を考える家族の会の寺西笑子代表は、「悔しい限りだ。あんな暴挙はない」、「過労死が増えることは目に見えている。(政府や与党などは)財界の意見しか聴いておらず、遺族の声は届いていない」と言いまし

た。

NHK記者だった娘さんが過労死した佐戸恵美子さんは、「数の力で強行採決したのは許せない。あなたたちの息子、娘が命を奪われたらどうするかと叫びたかった」と涙ながらに語りました。安倍総理は、過労死遺族の面会を断っています。

高プロは、年収1075万円以上の一部専門職を対象に労働時間の規制から除外するものです。年収要件も省令等でいくらか下げることもできます。

5月23日の衆議院厚生労働委員会では、安倍総理は、高プロ制度について「(制度の適用には)条件があり、健康を管理して対応していく」、「高い付加価値を生み出す経済を追求しなければならぬ。(働いた)時間ではなく、成果で評価する働き方を選択できる制度は待ったなしだ」と強調しました。

労働時間の規制がないことに関連し、国民民主党の山井和則氏は5月16日の厚労委で「残業が月200時間を超えたら違法か」と質問。加藤勝信厚労相は「直ちに違法ではない」と答弁しました。

高プロが適用される労働者には「年104日以上、4週間で4日」の休日

を与える健康確保措置が企業に義務づけられます。ただ、裏を返せば、4日間の休日があれば残る24日は24時間働かせても違法にはなりません。

また、政府が繰り返し強調し、高プロ導入により高まるとされる「成果」は、報酬に必ずしも結びつかないこともはっきりしました。5月23日の厚労委で、共産党の高橋千鶴子氏が「成果と賃金がリンクすると法案には書かれていないが」と質問したのに対し、加藤氏は「成果給を導入するのは労使で決めること」と答弁。労働問題に詳しい法政大の上西充子教授は「高プロが創設されても、企業が成果を測ってくれる保証はなく、看板に偽りあり、と言わざるを得ない」と語ります。

「全国過労死を考える家族の会」の寺西さんは、5月22日に衆議院厚生労働委員会であった参考人の意見陳述で「労働者が過労死しても、労災を認定されることは、ほとんど無理になる」と語った。長時間労働が過労死につながったとしても、高プロ対象者には企業側に労働時間を把握する義務がなくなるためです。寺西さんは「賠償も受けられず、遺族は泣き寝入りすることになる」と訴えています。

使用者側が、労働者に支払う賃金を低くおさえてかつ実質の労働時間を大幅に増やす、過労死拡大の高プロ制度に断固反対します。(河野)

「正面作戦に自ら陥る」へ外交を「自分ファースト」

米国外交の転換と半島和平に背を向ける安倍政権

◆米国内政治から見た「イラン核合意」 離脱と米朝対話

トランプ政権はオバマ政権時代にまとめ上げた「イラン核合意」から離脱した。トランプの世界的合意離脱は、ほかに地球温暖化に関するパリ合意や自由貿易推進のTPPがあるし、各種の自由貿易協定も離脱をほめかせて再交渉するとしている。理由はそれぞれ付けられているが、これらは基本としてトランプの選挙公約だ。

その影響はおおきい。とりわけ「イラン核合意離脱」は、中東情勢の更なる流動化をもたらしうし、イラン国内の経済的困窮も継続されるということも想定される。米国企業家はイランの核政策に一定のタガをはめて経済開放を実現し、資本進出で稼ぐこともできるだろうに。

ところが、何故トランプはオバマの政策をひっくり返したのか。それは直接的にはトランプの選挙対策である。共和党の支持基盤であり、自らの大統領選以来獲得したコアの支持層への「政治公約の実行」ということ

になる。米国民の二十五%も占めると言われる「福音派」の存在である。彼らのトランプ支持率は実に七十%に達するという。彼らはトランプのイスラエル寄りの政策を強く支持している。

同時に言うまでもなく、米国内のユダヤ系組織がトランプの親イスラエル政策を歓迎し、支持している。この二大勢力を「逃がしてはならない・・・」これがトランプの政策だ。

ユダヤ教とキリスト教の一派である福音派には何が共通点としてあるだろうか。日本人には理解しにくいのが、以下の共通点があるらしい。それは、モーゼに神より与えられた「約束の地」であるパレスチナからパレスチナ人を駆逐し、ユダヤの民が戻ることとは「旧約聖書にある予言」の実現であるという。この二つの宗教は、この点で一致しているらしい。

彼らの目的は、(そして当然イスラエルのネタニアフ政権の企み)は、パレスチナ全土の掌握である。二国家共存ではない。



イランの核合意からの離脱を表明した後、大統領令を示すトランプ米大統領

かつての「神の約束」は今では帝国主義的野望の正当化に堕している。

トランプは、選挙公約としてエルサレムへの大使館移転を決め、先日実行した。これは米国の従来政策である二国家共存(イスラエルとパレスチナ国家の共存)の事実上の転換だ。パレスチナ人が怒り抗議していること、そしてイスラエル軍が実弾攻撃で徒手空拳の民衆を殺戮していることはトランプとイスラエルに対して世界的な怒りを呼び起こした。

イスラエルにとって現在の「脅威」はイスラム国とイランである。イスラム国の脅威が低減した今、ネタニヤフ政権はイ

ラン核合意を破たんさせて、イランを孤立化に再び追い戻してから、攻撃を仕掛けるつもりであることは明確だろう。すでにシリアのイラン軍(革命防衛隊)を執拗に空爆している。しかし、こうなるとイランもミサイル開発を進めており、地域的紛争が激化するのには必至である。

イランも地域大国としてイラクやシリアに軍事的影響力を拡大しているし、イエメン内戦にも介入している(サウジとイランの代理戦争だとみなされている)。もちろん紛争拡大になれば米ロが沈黙していることはないだろう。

中東は、今や混とんとしている。

米国はシリアやイラクへの軍事関与を後退させたいという動きもあるし、トランプもこれ以上の深入りは考えていないようだ。しかし、「思い」と実際の政策は矛盾している。トランプには、このような先々の一貫した計画や見通しがない。秋の中間選挙と次の大統領選で再選されたいということだけなのだろう。それゆえの上記したイスラエル寄りの政策転換なのだ。さ

危険な駆け引きは止まるよ!

初めての米朝首脳会谈が近づいてきた、と思つたら、北朝鮮による首脳会谈の再考発言、対するトランプ大統領による中止書簡と、首脳会谈開催を通じた朝鮮半島の安定化に暗雲が垂れ込めてきた。

とはいえ、両国は首脳会谈中止の最終判断はしておらず、会谈実現の余地は残している。首脳会谈を視野に入れた両国のつばぜり合いは、緊迫度を深めている。

私たちににとっては、米朝首脳会谈の開催や朝鮮半島の恒久的な平和関係づくりが最終的な到着点ではない。が、それでも双方の妥協に基づいて、とりあえず朝鮮半島に平和と安定がもたらされることは、一歩前進だ。私たちににとっては、それが南北や日朝の労働者階級や民衆相互間の連携・連帯の出発点ともなるからだ。

米朝首脳会谈中止 一着地点をめぐるつばぜり合い

当面、首脳会谈中止、米朝の緊張の高まり、軍事衝突の危機の増幅、という道筋に抗議と警告の声を上げることが戦争への道を回避していくことが焦眉の課題となる。首脳会谈がうまくいって、一足飛びに安定化に向かうという楽観は許されないが、双方の対立を煽って武力衝突を招き寄せることはなんとしても避けなければならない。

◆つばぜり合い

米朝首脳会谈が接近するにつれて、自国に有利な着地点を追い求める両国のつばぜり合いが激しくなっている。

北朝鮮の金桂寛第一外務次官が5月16日、米朝首脳会谈の延期を示唆する発言をした。要は、北朝鮮の一方的な核放棄だけを強要する米国の態度を牽制したものだ。対するトランプ大統領。そうした北朝鮮の態度を非難したうえ、24日には首脳会谈を中止する旨の書簡を金正恩に送ったという。この書簡によって、米朝首脳による6月12日の会谈はなくなったことになるが、それはトランプ大統領の「考え」を伝えたもの。現時点で不開催が確定したわけ

らに米国はイスラエル援護射撃として、イランに対して「最大の軍事的、経済的圧力をかける」と強力な経済制裁を課そうとしている。イランと経済取引のあるEU、日本などに協力するように圧力をかけている。イランの再孤立化をおぜん立てしているのだ。トランプのいっそう厳しいイラン核開発規制への姿勢は、今後の交渉を見据えた北朝鮮への脅しでもあるかもしれない。

このような米国の政策に翻弄され傷つくのは中東の民衆である。またイランと言えども一枚岩ではなく、イスラム革命体制は特権化し、今では民衆の不満が高まっており、去年から各地で反乱が発生している。トランプ政権の無思慮な外交を中心に批判したが、イランも同様だし、シリアなどは国民の屍の上にアサド政権は築かれている。サウジアラビアなど王族国家は言うまでもない。何よりも、支配者の圧制や身勝手な政策ではなく、民衆自身の力を高め結束してゆかなくてはならない。政治を自らの手に獲得してゆかなくてはならないのだ。

◆「中国包囲網形成」外交の破たん、半島和平に背を向ける安倍政権の醜さ

イラン核合意からの離脱と、対

ではない。

首脳会谈の開催をめぐるこの間の両者のやりとりは、それぞれこれまで自分たちが主張してきた要求を少しでも自らに有利なカタチで決着させるためのつばぜり合いなのだろう。

北朝鮮は、米朝首脳会谈の開催に合意した後、矢継ぎ早に融和カードを切ってきた。米国人3人の人質解放、核実験場の廃棄、弾道ミサイルの試射中止などだ。これらは首脳会谈を間近にして態度を軟化させ、自分たちの要求をなんとか受け入れさせたいという条件整備なのだろう。

トランプ大統領も、強硬派のポンペオとボルトンを国務長官と国防長官に据える一方、金正恩の対応を手放して評価するなど、対北融和の発言も繰り返してきた。が、トランプ政権内でも強硬意見がなくなったわけではない。あくまで米国の一方的な要求の押しつけにこだわっているグループも存在している。核兵器の半年内の国外搬出や核技術者の国外移住など、強硬な要求は取り下げたわけではないからだ。

金正恩は、3月末に続いて5月始めにも電撃訪中し、習近平と会談している。これは、米朝首脳

イラン圧力を高める米国。他方では、米朝首脳会谈は東アジアにおける緊張緩和へのイベントになると期待されてきた。しかし、いまだにせめぎ合いが続く会議が今後行われるのかも定かではない。中止速報があったが、延期なのかどうか不明だ。

しかし、そもそもトランプ・キム会谈は、たとえ今後行われたとしても北朝鮮の核装備の撤廃と引き換えに抑圧的な金体制を米国が認め保護し経済で優遇する・・・と言ったものであり、まさに互いの支配層の取引に過ぎない。(現時点で両者の隔たりはプロセス論だけのようだ。)

こんなことを歓迎する国民はどこにもいないと思われる。もちろん、この数年米朝間は緊張が続き一側触発の事態もあった。米朝首脳会谈で、終戦・平和協定などが締結されれば、アジアの国民にとつてもその限りでは歓迎できるものである。しかし、そもそも米国の基지가韓国や日本に多数あり、大規模軍事演習でいやがうえにも東アジアで緊張を造り出してきたのである。危機や緊張の第一の原因は米国にあることを再確認すべきだ。第二には、金体制が、国民の犠牲の上に独裁と核兵器体系を造り出したのである。このような金体制の存在および擁護論を我々は断固として批判しなけ

会谈が失敗すれば、再度軍事攻撃の可能性が高まりかねない、という危機感からだろう。米国の強硬な要求が取り下げられる兆しも見えず、自分たちの要求も引き下げたくない北朝鮮としては、交渉が不調に終わって決裂という事態になれば、再度、米軍の圧倒的な軍勢力と単独で対峙しなければならぬからだ。金正恩としては、中国の後ろ盾を得ることでなんとかトランプ政権の譲歩を引き出したいとの思いからの訪中だったのだろう。

他方、強硬姿勢を続けてきたトランプ大統領は、3月8日に米朝会谈を受け入れたあたりから、米朝交渉での成果獲得への意欲も露骨に見せるようになった。朝鮮半島の非核化や平和構



築で成果を上げれば、自らの実績だと誇示することもできるし、米朝正常化が実現すればノーベル賞も受賞できるとの周囲の「よいしょ」にもまんざらではない様子。低空飛行を続ける政權浮揚のためにも米朝関係の正常化という実績への野心が芽生えたのだろう。

対する金正恩。中国の後ろ盾を得てある程度自信を得たのだから、トランプ大統領に揺さぶりをかけた。かたくなな米国の態度が変わらなければ首脳会談の見直しもあり得る、という外務次官の口を通じた発言だ。

金正恩は、米軍による軍事攻撃の脅威とただ1人向き合うことの恐怖心から、電撃訪中して習近平の後ろ盾を得ようとした。一方の習近平も、北朝鮮との疎遠な関係による影響力の低下を挽回すべく、北朝鮮と金正恩に対する影響力を自らの手にすることで北東アジア情勢での影響力を手にしたい、という思惑があったのだろう。中国の後ろ盾を手にした金正恩は、一定のフリーハンドを手にし、米朝首脳会談の再考発言など、再び米

国とのつばぜり合いを可能にした、ということだろう。

反面、米国本土まで到達可能な核ミサイルを手にしたいま、北朝鮮の金体制（金王朝）延命の保証を得るための、米国との交渉の最後のチャンスだと捉えたのだろう。それが成功しなければ、仮に米国による軍事攻撃を避けられたとしても、国際的な孤立と経済制裁による国内経済の疲弊で、北朝鮮の経済的な発展への道は閉ざされ、いずれは金体制も崩壊せざるを得ない、と考えたのだろう。首脳会談を通じた米国による体制保障を金体制延命のための不可欠の

◆金正恩の危機感

ワーカーズ前号でも触れたが、金正恩が対話に大きく舵を切ったのは、米国本土まで到達可能な核ミサイルの開発・配備

カードとする金正恩にとって、後がない正念場なのである。

◆トランプの打算

一方トランプ大統領はどうなのだろうか。

トランプ大統領は、歴代大統領による北朝鮮北非核化政策が、ことごとくダメされるとい

う失敗の連続だったとし、自らの力で北朝鮮の非核化を実現させることを政権公約として掲げてきた。

そのため、北朝鮮の、完全、検証可能、かつ不可逆的、な核廃棄（CVID）という高いハードルを金正恩に突きつけてきたわけだ。

ところが、金正恩は上記のように、米国本土まで到達可能な「核の兵器化の完結」を宣言（4月20日の中央委員会総会での金正恩委員長報告）した。その到達点を背景に、いまが米

◆安倍首相の無策と孤立

「対話のための対話では意味がない」「対話ではなく、いまは圧力のときだ」「国際社会のなかでリーダーシップを発揮する」「国難突破解散」と、大上

の強化がアキヒトへの好意的評価とともに策策されています。そのうしたなかで、新元号いらないという声をあげることは大きな意義をもっています。

元号法は、第1項「元号は、政令で定める。」、第2項「元号は、皇位の継承があった場合に限り改める。」「国旗・国歌法は、第1条「国旗は、日章旗とする。」、第2条「国歌は、君が代とする。」「という簡潔なものです。これがいま、とりわけ学校を席巻しています。

元号については実際の問題として、システム変更のムダも少なくありません。例えば、立川市では今年度「改元予算」として5300万円計上となっています。すべての自治体でこのようなムダな税金の支出があるはず。この一事だけでも、元号はいらないと言えるでしょう

。京都新聞は5月1日、「元号の存在感薄れる？ 改元まで1年『西暦の方が便利』」という記事掲載しています。その一部を紹介しましょう。

「『平成』はあと1年となり、来年5月1日からの新しい元号への関心が高まる。しかし、住民票発行や転入・転出届を提出する際、生年月日を西暦で記入できる様式が、京都府内の自治体で広がっている。15市のうち、元号に限定しているのは5市だけで、担当者は「特に平成生まれの若者に西暦記入が多い」という。大学の入学願書を西暦に限るところも目立ち、昭和に比べ、元号の存在感は薄れているようだ」

「1979年の元号法制定時、学者が『戦前の天皇制復活につながる、国際感覚の上でも不

段に構えてきた安倍首相。が、南北首脳会談の開催や、米朝首脳会談が合意されるや、「対話歓迎」と応ずる以外になかった。

北朝鮮の非核化や拉致問題解決にあたって、北朝鮮に対してはこれまで上から目線の圧力強化路線に終始。金体制の崩壊こそがすべての解決をもたらす、という高飛車なものであった。こうした強硬路線は自国だけで貫徹できるわけもなく、米・中・韓、なかでも米国を頼るしか実現し得ない「戦略」でしかなかった。

米朝韓中4カ国による朝鮮半島問題での「日本外し」は、米朝首脳会談以降も打開する見通しもない。仮に米朝首脳会談が実現した場合、休戦協定の平和条約への切り替えや在韓米軍の扱いなど、何らかのかたちで南北、米朝の間で交渉がおこなわれることになる。

その枠組みは、現時点では、米朝・韓国・北朝鮮の3カ国か、

すなわち米国本土まで到達可能な核ミサイルの開発・保有の阻止が目標だったが、日本は違う。中距離弾道ミサイルのノドンとそれに搭載可能な核ミサイルの保有、及び拉致問題の解決だった。

その解決のためには、周辺国との共同歩調ばかりでなく、独自の日朝関係へのアプローチや独自の交渉チャンネルの保持が欠かせなかった。ところが



便』との反対声明を出し、今回も新元号に反対する署名活動が行われている。ただ各市に聞くと、2012年7月に在日外国人の住民票登録が始まったことを契機に西暦欄を設ける市が増えたとみられる。転入・転出届を西暦可にする南丹市は『日本人でも西暦で書く人がおり、想定外だった』という」

西暦を使い英語で話す、それ

以外の正解はないとはいえないが、意思疎通の手段としてはそれが最善だと思えます。それ以上に、天皇の暦の下での生活など真つ平なので

す。元号は使わない、目の丸や君が代に敬意を払わない、高貴な血脈など認めない、そんな生き方もありだと私は考えています。

（晴）

それとも中国を加えた4カ国で行われる可能性が高い。かつての6者協議の枠組みである日口を加えた6カ国の枠組みは、実現性、実効性とも低く見られている。

いずれにしても、現状では朝鮮半島問題での「日本外し」が打開される見込みは開けていないのだ。トランプ政権でさえ強硬な言葉のキャッチボールの割には圧力一辺倒ではなかった。一方、ナシヨナリズム＝排外主義を軍事大国化のテコとして利用してきた安倍首相。北朝鮮に対して強硬姿勢をとり続けることだけしか頭になかった安倍首相。米朝首脳会談、その中止、会談再合意などという急激な局面展開になすすべもないのは、当然という以外にない。

現時点（5月26日）で、トランプ大統領の会談中止書簡に対し、北朝鮮は「対座して問題を解決する用意がある」との談話を出し、トランプ大統領も、「（首脳会談を）6月12日に開くのも可能。情勢を見守ろう」と語っている。まだ米朝交渉が完全に破綻したわけではない。今後も両国のつばぜり合いは続く。私たちとしては、交渉破綻による米朝緊張の高まりから武力衝突へと突き進まないよう、警戒と監視の声を上げていきたい。

（廣）

元号なんかいらない！



法そのものにはいかなる強制力もありませんが、現実社会ではその使用が「強制」されています。今まさに、「生前退位」という新たな事態のなかで、天皇制

元号の存在感薄れる？ 改元まで1年「西暦の方が便利」

「平成」はあと1年となり、来年5月1日からの新しい元号への関心が高まる。しかし、住民票発行や転入・転出届を提出する際、生年月日を西暦で記入できる様式が、京都府内の自治体で広がっている。15市のうち、元号に限定しているのは5市だけで、担当者は「特に平成生まれの若者に西暦記入が多い」という。大学の入学願書を西暦に限るところも目立ち、昭和に比べ、元号の存在感は薄れているようだ

「1979年の元号法制定時、学者が『戦前の天皇制復活につながる、国際感覚の上でも不

新元号 制定に反対する署名

内閣総理大臣 殿

天皇即位特例法にもとづいて、天皇の退位を2019年4月30日とすることが決まりました。「平成」は、この日もついで終わります。政府は「元号法」に基づき新しい元号を改定するとしています。わたしたちはこれを機に、新しい元号を制定しないことを求めます。

元号制度は、古代中国において、皇帝が即位を支配することを目的として作られたものです。「王」や「君主」の在位に合わせて暦を改定する制度は、現在では日本にありません。元号は「君主」の時代に氏名を冠するもの、本来的に非民主的な制度であるといえます。

2017年にNHKが行った世論調査によると、「西暦よりも元号をつかう」と回答した人は28%に過ぎません。その一方で「元号よりも西暦をつかう」と回答しています。改元のための騒ぎで、きかれる不承知な多くの人が感じ、元号は氏名の中からも息を吐き出しています。しかし残念なのが、政府や学校などでは元号の使用が強制され、氏名と氏名欄と氏名欄を併用する場面では元号を使うことが事実上強制されています。

元号を変更することによる様々なシステム変更によって、大きな混乱や事故、また経済的な損失がもたらされることは、「昭和」から「平成」への改元でも起きたことです。このような混乱をもたらす元号は無用の長物ではありません。新しい元号を制定せず、元号制度を終わりにして欲しい。

【諸願事項】

一、新しい元号を制定しないでください。

氏名	住所

1次集約：2018年4月30日

【元号はいらない署名運動】

集約先：東京・天皇制問題情報センター（元号署名を中）と明記下さい
東京都新宿区西新宿2-3-10-31 キリスト教事業推進委員会事務局

取り次ぎ団体：

『米軍の北朝鮮爆撃は6月！』

米、中が金正恩体制破壊を決定する日

副島隆彦氏著 光文社刊行

トランプの大統領選勝利を予言して的中させた副島隆彦氏の次なる予言は「北朝鮮Xデー」を6月末、遅くとも7月4日以前とする大胆予言である。さてこの予言は当たるか否か。

ここで問題となる副島隆彦氏の具体的な予言を正確にお伝えすれば、去年4月に行ったもので「アメリカは相手に先に手を出させる。北朝鮮から韓国に通常ミサイルを撃たせる。それを合図に米軍のパンカーバスター（地中貫通型大型爆弾）搭載の巡航ミサイルによる一斉のピンポイント（精密）攻撃が行われて後、中国軍が侵攻する」との予言である。

そして今回出版されたこの文在寅大統領の戦略は平昌オリンピック以降、金正恩委員長の思惑と重なって朝鮮半島における南北融和ムードが急速に拡大したことは、皆さん周知の事実である。このため、この本が出版された3月上旬には、

読書室



副島氏の予言は大いに嘲笑されたものである。北朝鮮が中国の庇護の下に入ったことで北朝鮮の孤立は救われ、米朝会談ではこの後ろ盾を得たことにより、北朝鮮問題は平和的に解決するのだ等との認識は、「世に倦む日」の田中宏和氏等によって拡大されてきたが、5月下旬に至って急展開し変化しつつある。北朝鮮の南北会談を無期限に延長するとの動きやまたトランプも米朝会談は中止するとの声明は、今後、本当に米朝会談が開催されるか否かの問題に発展する勢いである。

ここで私たちは2・3・4月に醸し出された南北融和ムードとは一体何だったのかを冷静に振り返るとともに、「6月に米軍の北朝鮮の爆撃は必至である」とまるで際物のようにタイムリーに出版された副島氏の本を、今こそ真剣に読み込む必要があるのである。

では本書の目次を紹介することで、この本の構成をまずは確認したい。

まえがき
第一章 北朝鮮爆撃はなぜ6月なのか？
副島隆彦の予言は当たったのか
第二章 高永喆（元韓国国防省分析官）との緊急対談
米軍の通信傍受体制から、北朝鮮の新体制まで：白熱討論
第三章 2018年6月、北朝鮮体制崩壊へのシナリオ
第四章 トランプの本音は北朝鮮問題を1カ月でさっさと片付けたい
第五章 習近平「北朝鮮処理のあと、西太平洋を中国に渡せ」
あとがき

本書の構成は、以上に書き出した通りである。予言への自己確信の強さが感じられる。

本書で副島氏が強調したいことは「アメリカは北朝鮮に対して、堪忍袋の緒が切れつつある。自分たちを核兵器で脅す国の存在を許さない」こと、「文在寅大統領が北朝鮮の独裁者金正恩」の「救援」に向かったこと、アメリカは北朝鮮の睨み合いは最終局面に入っていくこと、「こうなると金正恩としては、ますます絶対に核ミサイルを手放さない」こと、トランプと習近平は金正恩を許すことはないこと、つまり「超大国であるアメリカと中国は、金正恩と文在寅を自分たちと対等の話し相手（交渉相手）」だとは認めていない。こんなチビコロ国家の指導者なんか、大国の力で叩きのめしてやると考えている」こと、そして米国・中国・ロシアの「新ヤルタ体制」で「北朝鮮処理」をすることである。

さらに副島氏が本書であまり書いていない部分を、北朝鮮問題とイラン・中東問題がリンクしていると分析した田中宇氏の重要記事に注目する必要がある。彼の国際ニュース解説は、トランプのイラン核協定からの離脱を取り上げている。この5月中にも最新記事順に紹介すれば「英スクリパリ事件と米イラン協定離脱の関係」、「イラン・シリア・イスラエル問題の連動」、「トランプのイランと北朝鮮への戦略は同根」、「トランプがイラン核協定を離脱する意味」と実に4本も書いている。これらでの田中宇氏の指摘は重要だ。

また、佐藤優氏と共著も出版している高氏と副島氏との討論が収められている。

この章は討論であるから簡単に纏めることは出来ないが、今回の北朝鮮攻撃は「スモール・ウォー」で終わる、今の戦争は最先端の電子攪乱戦なので北朝鮮の通信網、コンピュータネットワーク等を麻痺させてから攻撃する等、攻撃のターゲットは約7百箇所を2千発で攻撃する、侵攻するのは瀋陽軍区の兵士等々の極めて具体的な指摘が充ち満ちている。

第三章は、本書の肝である。それは副島氏の予言がどういう背景から生み出され、何故必ず的中すると断言できるのか、それはどういうシナリオで進むのか、その根拠を一つひとつ解説している章だからである。最大の論点は核兵器保有の主権を持つ北朝鮮を止められるのは国連総会の決議だけだとの指摘と「新ヤルタ体制」、つまり米国と中国とロシアで世界を支配する、そして「北朝鮮処理」をお膳立てしたのはキッシンジャーであり、彼の人生最後の大仕事だとの指摘等である。ここだけでも皆さんへぜひ読むことを勧めたい。

あとがきでは、日本の右翼の中に「北朝鮮を征伐に行く」と

『トランプの1億年』 島泰三著（中公新書）

現在、私たちは福岡で人類学に関係する読書会を、月一回のペースで行っています。そのうちの一冊が島泰三著『ヒト―異端のサル』の1億年』（中公新書）です。他に河野本道著『アイヌ史／概説』（北方新書）も勉強しています。

第五巻は、中国が米国の次の覇権国を目指すこと、習近平が「共青团」勢力を骨抜きにして権力闘争に勝利したこと、政治警察を掌握したこと等が明らかにされ、永らく副島氏を小馬鹿にしてきた「中国崩壊論」の崩壊に対する副島氏の高らかな勝利宣言である。

ここで重要な事実を紹介しておけば、2016年末に習近平は中国軍にテコ入れて7大軍区（各々が軍閥だった）を5大戦区へと一大改革したことである。こうした事実があったればこそ、習近平は一大改革を終え

読書室



島氏は同書でこんなことを書いています。

「日本列島には、たぶん世界で一番幸せな漁撈採集民が暮らしていた海辺が残っていたが、水俣病が多発した一九五〇年代には、その幸せの風景はついに幕を閉じた。私が小学六年生（一九五九年）の夏、水田に最初の農薬が撒かれて、イナゴも小川のメダカもドジョウも消えうせてしまった。（略）少年時代の楽園の日々は、目の前で閉ざされ、永遠に終わりを告げた。それ以来、私は現代文明を全く信用しなくなった。（略）

こうして島氏は、文明批判の視点から自然人類学の道に進むようになったのです。そうした島氏の目には、今の文明はどのように写っているでしょうか？

「私の考える自然人類学の視点は、類人猿と化石人類はもとより現代人についても生命体としての全体観が得られる視点である。しかし、それは現代人にとってよい点をつけるための方法ではない。「賢い人、ホモ・サピエンス」だったはずの現代人の中には、あえて名づければ文明化人ホモ・クルトゥス（Homo cultus）」とでも

●自然人類学との出会い

ともあれ、類人猿の研究の面白さに目覚めた島氏は、世界中をフィールドで駆け巡り、マダガスカル、原猿類の観察から始め、スマトラとボルネオのオランウータン、ルワンダのゴリラ、タンザニアのチンパンジー・・・と、様々な類人猿を観察してゆきます。さらに化石人骨の観察により、アウストラロピテクス、ホモ・エレクトゥス、ネアンデルタールなどの猿人や旧人を経て、現人であるホモ・サピエンスについて考察します。その詳しい内容は、別の機会に紹介するとして、私が「面白いな」と思ったことを述べましょう。

●歌うオランウータン

そうです。

オランウータン、ゴリラ、チンパンジーといった「類人猿」は、他のサル（ニホンザルなど）と異なつて、私たち人類に近いと感じられると言います。例えばオランウータンは「歌を歌う」のだそうです。「彼は（略）大きな木にやつてきた。（略）彼は枝の先端まで丁寧にとどつて、この小さな果実を食べた。（略）彼は半時間かけて大きな木の果実をほとんど食べ尽くすと、私たちから見えない木の死角になる側に入つて、歌を歌いはじめた。その歌は森をゆるがし、谷を越え、地上にへばりつくしかない哀れな人間の心を揺さぶつた。歌は二分以上続き、最後に深い反響音を繰り返して終わった。オランウータンは歌を歌う！学者はそれをロング・コールと呼ぶ。（略）オランウータンこそは、もっとも初期に人類の枝と分岐した大型類人猿である。その時代から彼らはこの歌を歌つていただろう。類人猿の歌に二〇〇〇万年に及ぶ歴史があるとしたら、私たちも自分たちの歌について何事かを悟るのではないだろうか。」（第二章 歌うオランウータン）より）

た。（略）「ボディ・ランゲージ！ですよね？」と叫んだほど、人間と共通の動作だった。」

●チンパンジーの心の闇

一方、チンパンジーには「心の中に秘める暗く深い闇の知能」があると云います。以下は、島氏が研究者の増井氏から聞いた、チンパンジーの「ントロギ」に殺されたと言ふ体験談です。

「十一月十三日、Mグループの雄たちは雨が降ってきたときに特有のレインダンスの最中だった。（略）力自慢のントロギはあちこちに石を投げるデイスプレイをやっていた。その石が地面に置いてあった増井さんのカメラバッグに当たりそうになったので、増井さんは警告として石を投げた。それが（略）ントロギの頭にたまたま当たり、ントロギは不意打ちの衝撃のためにシュンとして、デイスプレイをやめ、彼にとつてなにより大切なボスとしての面子を失った。ントロギはそれから一週間以上、増井さんの視界から消えた。「まわりにいるらしい感じはあったが、姿は見えなかった」と増井さんは言う。

当つて昏倒し、取り囲んでいたチンパンジーから食われまいと必死で逃れたが、三日間寝込むことになってしまった。増井さんはどう考えても、これはントロギの復讐としか思えないと語る。それは、木の枝が落ちる直前にントロギの変な行動を確認していたからである。「ントロギを見ると、彼は私から十五メートルほど離れた敷の中にいて、太いツルを引っ張つては揺らしていた。（略）私は（略）『いったい何のつもりだろう』といふかしんだ。その瞬間、私は頭に衝撃を受け昏倒した。」事後に調べたところ、ントロギが引っ張っていたツルは増井さんが立っていた地点に生えている木の上まで伸びていた。ントロギは恨みを決して忘れず、復讐を入念に準備する性格を持っていた。」

●環境によつて形成される性格

歌を歌うどこかマイペースなオランウータン、どちらかというと陽気で優しいゴリラ、恨みを忘れず復讐するチンパンジー。

こうした類人猿のそれぞれの性格は、それらが棲んだ環境の違いによつて形成されたもののようです。豊かなジャングルの中で不自由なく木の実を食べて

育つたか、乾燥化した草原で乏しい食料を奪ひ合つて育つたか・・・。

こうしてみると、私たち現生人類の様々な性格、優しく助け合う心がある一方、猜疑心や復讐心もある、環境によつて相反する心理が発現する人間の性格は、もしかすると類人猿の数千年にわたる歩みを通じて育まれ、私たちに伝わったものなのかもしれないと思うのです。であるなら、また次のようにも言えるのではないでしょう か？ 私たち人類は、ともすれば欲に任せて資源を奪ひ合い、富の独占のため殺しあう潜在的性格（チンパンジー的の性格？）を

通販生活（夏号）の特集

『九条と沖縄』を読んでビックリ！

私の連れ合いがカタログハウス（株）の「通販生活」を購読している。

最初はカタログ販売の雑誌程度と軽く考えていたが、連れ合いから「この通販生活はとても良い記事が多いよ。特に沖縄関連の記事が凄い」と進められて読む機会が増えた。今度の最新号の「夏号」を読んでビックリ！

特集として「九条と沖縄」が組まれていて、本土の私たちに訴える内容がすばらしい。第1部の「落合恵子さんと稲嶺進さん（前名護市長）」との対談」での見出しが、「米軍基地が必要というなら、沖縄に押しつけずに全国で負担して欲しい」とアピール。対談内容を少しだけ紹介する

袴田さんに一刻も早い無罪判決を！

1966年、旧清水市で一家4人が殺害された事件の犯人として、確定死刑囚とされた袴田 蔵さんは、2014年静岡地裁によつて、冤罪の可能性とともに「これ以上の拘置を続けることは耐え難い程正義に反する」として48年ぶりに身柄を釈放され、再審開始が決定された。

本来ならば、すぐにでも再審が始められるべきであるにもかかわらず、検察が即時抗告したため、4年以上もの時間を無意味な検証実験などで浪費させられてしまった。来る6月11日、やつと東京高裁での再審可否の決定が出される事になった。

82才の袴田さんは、糖尿病を抱えつつ、午前も午後歩き続ける毎日だが、心はいまだ妄想の中にいて、獄中のままだ。死刑執行の恐怖から解放し、蔵さんの心を獄中から取り戻す、つまり真の自由を手に入れるためには、一刻も早い無罪判決が必要だ。

しかし6月11日に再審開始決定が出されたとしても、再び検察が最高裁に特別抗告をしてくる可能性はある。再びこれ以上の無意味な時間の浪費は決して許されない。



「袴田蔵の壁」

〈稲嶺〉「辺野古基地の工事は全く進んでいません。埋立て面積では1%も完成していないのです」と説明。

〈落合〉「辺野古の新基地建設は、『もう後戻りできないほど進んでしまっている』という解釈は、間違ひなのですね」と納得。

〈稲嶺〉「基地建設は必ず設計変更が必要になる。変更には県知事の承認が必要なので、翁長さんの再選で工事を止められます」と説明。

〈落合〉「基地建設ストップ、日米地位協定の改定、『本土』への基地引き取り、この3つの宿題に『本土』の私たちがどう応えるかです」と本土の課題をズバリと指摘。

第2部の連載「国民投票が近づいてきた」の中で、「『九条を考えること』は日米安保条約を考えること、日米安保条約を考えることは、米軍基地の7割



色鉛筆

「海を壊すな！海泥棒！」

1年前の10倍もの工事車両を投入して、6月から7月にも土砂を投入して埋め立てようとしているが、辺野古側は浅瀬で作業は容易だが、実は反対側の大浦湾には、活断層の可能性やマヨネーズのような地盤強度がゼロの地点などあることが指摘さ

今、辺野古では毎日10トンダンプカーが、9時、正午、3時と強行に資材搬入を繰り返している。5月16日は延べ361台、17日延べ347台、18日延べ329台。1回につき100台以上の車列が続くため、路線バスは渋滞で、ともに走れず、辺野古を迂回せざるを得なくなっている。

政府は莫大な予算と、人員（機動隊、海保職員、民間警備員など）を投入し、あたかも基地建設は後戻り出来ないとの演出をもくろむが、それは事実ではない。市民らの抗議は、海でも陸でも決して止むことはない。

去る4月23日〜28日「ゲート前で連続6日間／500人を集めて工事を止めよう」との呼びかけに、最後の2日間だけ参加した。実際には700人や800人が集まった日もあったが、残念ながら「遅

らせる」ことは出来たが「止める」ことは出来なかった。多数の機動隊員が配備された上、通称カマボコと呼ばれる機動隊の大型車両5台と、基地フェンスとで挟んだ歩道を即席の「檻」として、排除した市民を次々と閉じ込め、工事車両を通すというひどいやり方で、長い人では1時間以上カマボコの排気ガスの中に閉じ込められる。

4月27日（金）昼、600人の人と座り込むと、機動隊員が二重三重に取り囲み、向こう側は見えない。多勢に無勢で約30分で全員排除、拘束された。続く3時には、わずか25分だ。

工事を止められないことで、この行動は甘いと批判もあつた。そもそも「アリ」の沖縄が象に挑む様なもので、力の差は歴然だ。今のところ工事を止められるのは、皮肉なことに台風と天皇の訪沖（警備に取られる）位しかない。だが決して諦めない「アリ」の意志を侮るな

た。そもそも「アリ」の沖縄が象に挑む様なもので、力の差は歴然だ。今のところ工事を止められるのは、皮肉なことに台風と天皇の訪沖（警備に取られる）位しかない。だが決して諦めない「アリ」の意志を侮るな

た。そもそも「アリ」の沖縄が象に挑む様なもので、力の差は歴然だ。今のところ工事を止められるのは、皮肉なことに台風と天皇の訪沖（警備に取られる）位しかない。だが決して諦めない「アリ」の意志を侮るな

た。そもそも「アリ」の沖縄が象に挑む様なもので、力の差は歴然だ。今のところ工事を止められるのは、皮肉なことに台風と天皇の訪沖（警備に取られる）位しかない。だが決して諦めない「アリ」の意志を侮るな

た。そもそも「アリ」の沖縄が象に挑む様なもので、力の差は歴然だ。今のところ工事を止められるのは、皮肉なことに台風と天皇の訪沖（警備に取られる）位しかない。だが決して諦めない「アリ」の意志を侮るな

た。そもそも「アリ」の沖縄が象に挑む様なもので、力の差は歴然だ。今のところ工事を止められるのは、皮肉なことに台風と天皇の訪沖（警備に取られる）位しかない。だが決して諦めない「アリ」の意志を侮るな

新島製菓の理の立て承認撤回を後押ししよう！



ゲート前連続6日間

あなたの思い どうか辺野古へ

500人結集

4月23日（月）～28日（土）
8:00～16:00

辺野古
キャンプシュワブ
ゲート前

人が集まればゲートは開かない
多勢に無勢で約30分で全員排除
工事止まる
希望の一端をつくらう

https://www.facebook.com/edgeofpeace

翌28日（土）朝ゲート前に座り込むも、この日は搬入はなく山内徳信元読谷村長らによる即興の辺野古学校の様になる。沖縄の長い闘いの歴史や、目の前に立つ若い機動隊、警備員に向けての「誇りを持って仕事を

して下さい」という心の底からの訴えは胸を打つ。続いて立った彫刻家の金城実氏が日米地位協定について話す。米兵拒み、日本政府



の車に殺された知人の息子さんが何の手立てもしていないからだ。

昨年12月、保育園や学校に米軍ヘリの部品が落下するという許しがたい事故を起こしながら、いまだ平然と上空を飛び続け、それを容認している政府。普天間第二小では、新学期以降4月9日から5月19日まで、146回もの避難を強いられている。安全な空は無く、授業など成り立つはずもない。

沖縄からは、日本政府の醜くゆがんだ姿がよく見える。押し付け、ごまかし、踏みこじり、差別し尽くす。（澄）